秋田さきがけ　1992年(平成4年)11月11日　水曜日　(20)

秋大で研修のベラルーシの医師2人

高いレベルに意欲新た

チェルノ被ばく者治療に一助

県費留学生として旧ソ連・ベラルーシ共和国（旧白ロシア共和国）からやって来た若手医師二人が秋田大医学部で研修に励んでいる。チェルノブイリ原発事故被ばく者の治療に携わる医師たちに日本の進んだ医療技術を学んでもらおうと招いたもので、二人は六月に来県、もう一人の医師も先月下旬から研修している。同共和国支援のため県内の民間人が中心となって「秋田・ベラルーシ友好協会」が七月に設立されており、今後親善交流が一段と深まりそうだ。

本県とベラルーシ共和国（トゥールさん）との交流は、日本ユニセフ協会秋田支部の会（佐々木正光代表）が昨年二月に行ったチェルノブイリ原発事故の被ばく児を救うための募金活動がきっかけで始まった。この活動に対し、当時の白ロシア共和国・ケビチ首相らが答礼と二度の支援要請のために来県、佐々木知事を表敬訪問した。また、知事も四月に同共和国を訪れるなどつながりを深めている。

県は人材育成面での支援策の一つとして、同共和国の医師二人を本年度の県費留学生として秋田大医学部に招くことを決め、この六月にユリー・シェフェルさん（三）が来県、同学部第三内科（三浦発教授）で研修に励んでいる。また、来日が遅れていたゲンナデー・トゥールさんも先月二十日から同第一外科（小山一研二教授）で学んでいる。

ユリーさんは、同共和国ゴメル州立病院の医師で血液学が専門。被ばく者に多い白血病の治療の一つである骨髄移植に関しては全国でもトップレベルにあり、ユリーさんも移植技術などを中心に研修を行っている。

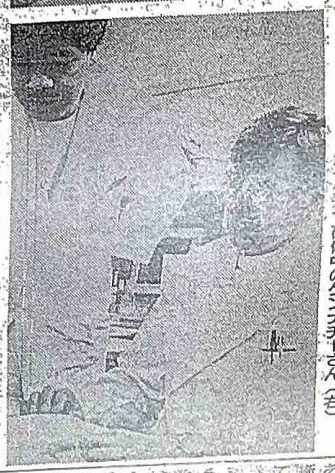
また、ゲンナデーさんは、ミンスク市立腫瘍（しゅよう）学病院の外科医でがん治療が専門。ベラルーシでは、被ばく児の甲状せんがんが増えているといわれ、その治療法や他のがんなどについても先進の医学知識を学ぶことにしている。

二人の研修期間は一年の予定だが、ベラルーシからは計六人の受け入れ要請があり、県では来年度以降も県費留学生を招く予定。

ユリーさんは「母国で骨髄移植が行われればビッグニュースなのに、秋田大ではがなの数をこなしており、レベルも高い。学ぶところが多く、帰国後は骨髄移植に自ら取り組みたい」。またゲンナデーさんは「がん治療の医療技術だけでなく、がんの集団検診などについても学んで、ベラルーシの医療向上に役立てたい」と意欲をみせている。

一方、七月に発足した「秋田・ベラルーシ友好協会」（今村久悦会長）は日本ユニセフ協会秋田支部の会員らが中心になって設立した。会員は百四十人ほどに、留学生支援のほか、現地で不足している医薬品や医療機器を送る運動などに取り組み、親善交流を深めるのが目的。十日夜には、ユリーさんとゲンナデーさんの歓迎会を兼ねた同協会設立記念パーティーが秋田市内のホテルで開かれ、互いに交流を深めた。

第三内科のミーティングに参加するユリーさん（右）



第一外科で研修中のゲンナデーさん（右）

No. 84